

—佐野氏は志願をせず幹候を受ければ陸軍将校への道があつたが、一時も早く軍務へとの意志のもと特幹への道を選んだと言われている

工業学校の機械科を出て海軍工廠に勤めていた佐野岩男候補生は、勉強に励んで一通り頭に入れたものの、八四五の整備よりも主脚の故障、不具合に悩まされることになる。

脚でもう一つの問題だったのは、四式戦で飛び始めたばかりの錬成員が、三舵の操作に夢中になり、脚を出し忘れて胴体着陸が何回かあつたことだ。胴体着陸すれば、プロペラが地面をたたいて回転軸がゆがみ、大抵は使いものにならない……。

また、元飛行第五三戦隊員原田良次著「帝都防空戦記—B29体当り特攻の悲劇」の附録IIの体当り者一覧表六十二人中に、倉井利三少尉が記載されている。

『倉井利三 少尉 操縦下士官第七七期 一錬飛B29の尾部に体当り粉碎。その破片が二番機に激突。

二機撃墜。戦死』

## 航空整備兵の戦歴

愛知県 大野 實

昭和十七年徴集の現役兵として昭和十八年四月に各務原の飛行師団第一航空隊に入隊しました。入隊前は名古屋市内の藤田製作所に勤め、砲兵工廠の砲弾などの製作に従事していました。家庭は父は既に没し、母と妹の三人暮らしでした。私の入隊出征後は、母は和裁の師匠、妹は会社勤務で、出征家族援護などは断つて頑張ったそうです。

入隊後間もなく加古川の第二航空教育隊整備中隊に転属。ここで九月まで初年兵教育を受けました。教育内容は一般歩兵の初年兵教育と共に整備兵としての教育も加わりなかなか大変でした。

また内務班の扱き（しごき）の厳しさは並大抵なものでなく、ビンタは第一日目から始まり、編み上げ靴で顔面殴打で顔面変容するすさまじさです。およそ内

務教育の範疇を超えた仕業で、古参兵の日々の気分次第で扱き内容も日々変化がつけられました。

編み上げ靴が損じたため修理に出した際、「貴様は新しい靴欲しさにわざと靴をこんなに壊してしまったのだ。そんな奴は営倉行きだ」と激しく叱責され、「そんなことはありません」と最後まで主張を曲げずに頑張りました。お陰で身上調書に「強情者」と記入され、除隊まで軍隊生活の終始、この身上調書が私と行いを共にしました。

昭和十八年九月部隊は山口県大田原に集結し、宇品港より輸送船「阿波丸」に乗船、シンガポールを目指して出征の途につきました。上陸後鐵路にてマレー半島を北上し、ビルマの中央部のメイクティラーに到着、十二月四日、第五飛行師団第五二飛行場大隊に編入され、さらに前方マグウエに前進し本隊に合流しました。この当時ビルマの戦線は日英両空軍はビルマの制空権を囲って必死の争奪戦の最中にあり、到着の日も印度油田地帯を目標とする戦爆編隊の出撃を見送ったものであります。

師団は爆撃機三十機、戦闘機五十機を主幹とした威力を誇る編制であった。敵英軍航空戦力はわが方より数倍の機数を所有し、侮り難いものがあつたが、わが方は搭乗員の技術の優勢と闘魂の熾烈さで敵に対していたのであつた。

昭和二十年に入るとわが軍の機の損耗に対する補給は皆無の状況に比し、敵機は無尽の増強・膨脹を行い、ビルマ上空の制空権は全く敵手に落ちてしまった。

こうなると私たち整備の仕事はほとんどなくなり、飛行機の補修、整備、陣地補強等の作業に移行してきた。こうした作業は、ビルマ住民の協力によって行われ、飛行場近辺の各部落より使役要員の徴用で行われた。敵機の空襲下の危険作業であつたため、だんだん作業要員の不足を来し、中には父兄のない家庭などからあどけない小学生の児童が牛車を引いて作業に参加する者もあつた。

作業も昼間は敵機の空襲に妨げられ夜間作業に移行せざるを得ないようになる。昼間作業時、あの行動の鈍い牛車が空襲下に四散する際、馬車以上の迅速さで

避難したのには私たち一同驚いた。

ビルマ住民は日本軍に対し、誠意を持って協力してくれたことを思い出します。昭和二十年二月二十五日、多数の戦車を伴う敵が我々のメイクティラー飛行場前面に姿を現したのであった。これに対し飛行場を死守する我々は整備中隊を主力とし一個大隊約五〇〇名でメイクティラー湖を前面に、その湖の北東の丘に布陣したのである。対戦車戦計画は、湖の中央部の狭隘部に架かる橋梁に爆薬を仕掛け、敵先頭戦車二、三両通過後爆破、敵を混乱に陥れ、その混乱に乘じ砲撃、肉迫攻撃を敢行、敵を撃破することに決定し、この計画を兵に至るまで徹底させる。

第一日は敵戦車の出現はなく、夕方、敵戦車の引き揚げ音を遠くに聞いたのみで夜を迎える。蝟壺壕内で明日の対戦車戦闘を期して静かな夜を迎える。過ぎし青春の日々の追想、覚悟を決めた心境は不思議なほど静かであった。煙草が欲しくなり隣の古年兵に煙草一本所望すると、日ごろけちなその古年兵が、意外にポイと一箱くれる。彼も死ぬ直前の心境の変化であろう

かと驚いた。

第二日目、敵機の急降下爆撃に次ぐ地上掃射と、繰り返し繰り返し襲撃が続く。部隊長命令として絶対発砲は禁ぜられていたが、ついに耐えかねてか、機関銃中隊が射撃開始、一機に命中弾を与え敵機は黒煙を噴きつつ飛び去った。一同快哉を叫んだ。

第三日目、朝来、数十機の攻撃を受ける。昨日の報復攻撃も含まれていることなのである。目も口も開けられない凄惨な急降下攻撃に一日が暮れる。

第四日目、左後方の小高い丘に陣地変換の命が下る。まず、各人が潜む蝟壺壕の構築にかかるが円匙えびもなくゴボー剣が頼りだ。それがなんと土地が固くて掘れない。焦りに加えて昨夜の睡眠不足が加わり猛烈な眠気が襲う。中隊長は作業の進捗しないのを気にしてか、壕の周りをうろうろ回りながら督励につとめる。こうした状況下、准尉が「大休止、仮眠」と下命、兵は喜んでそのまま横に臥す。准尉をせめる中隊長の叱声を子守歌に眠りに入る。

第五日目、部隊は更に後方の丘へ陣地を移動する。

今日は昨日と異なり土質が軟らかく、壕が気持ち良く掘れる。壕を掘り終わったその瞬間、前面一円に敵大戦車群が現出した。と同時に怒濤の崩れ落ちるように、我々の陣地の前面を全火力を挙げて掃射を浴びせながら正面本部陣地に向かって戦車群が突進して過ぎる。

蝗のように戦車に立ち向かう肉薄攻撃の兵士の姿、白刃をかざして飛び出す将校の姿、将に地獄絵図である。樹上に潜んでいた狙撃兵も猛烈な掃射に瞬時に一掃され尽くす。我々が対戦車火器として唯一のフトン爆雷も敵の重戦車に対しては破壊力零に等しく全然齒がたたない口惜しさ。戦闘中私はいつの間にか川の線まで後退していた。

河畔は十メートルに近い断崖で、台上では銃砲弾が飛び交い戦闘がまだまだ継続し終わらない。川底は地隙となり台上の戦火から避けられていた。地隙の河穴を見付け、そこでいつの間にか恐怖の底からの睡眠に陥っていた。夢の中で不思議と母の夢を見た。この川底で五、六名の戦友と一緒に。そして反対側の絶壁を這い登る。初年兵は銃を手に残していたが、古年

次兵は既に銃を手していない。

執銃者は断崖の登攀に苦勞する。台上は人影も無く既に暗夜である。匍匐で少しずつ前進を続けるうち前方に物の気配を感じ、停止してじつと様子を窺うことしばらく、闇の中から小さな声で「だれか」との誰何を受け、ホッと安堵の胸を撫でおろし「友軍」と告げる。高射砲隊の兵であった。

部隊は「ピンナマ」に集結の命令が出ていることを知る。同行の中に経理室勤務の者もいて、軍票を沢山持参していたので途中の部落で食糧を買い込んで、夜間牛車を備ったの後退を続ける。途中英軍の装甲自動車部隊が我々を追い越して先行したらしい情報を入力する。ピンナムの近くの道路の交差点付近の敵情に注意を払いながら転進行軍を続ける。

この転進行軍途中の出来事であった。ある部落で休憩していた私たちの前を部落の女、子供の一団が川へ水汲みに通った。その時、中の一人の少女が私の前で立ち止まり視線を私に向けて首を傾けて通り過ぎた。しばらくしてまたこの一団が水を汲み終わって私の前

に進み、少女がまた私の前に行んだ瞬間「アーそう  
だ」と思い出した。それは半年も前にここからグンと  
離れた北の地区にいたとき、敵機の不意な地上攻撃を  
受けた際、私たち兵隊と共に部落のビルマ人も攻撃の  
巻き添えを食い、足部に被弾したこの少女を庇い敵機  
の地上掃射から救い、負傷した足の手当を施してやっ  
た事を思い出したのであった。直ちに少女の足を調べ  
て傷痕を確認し、不思議な巡り合いに驚いた。この報  
が部落中に宣伝され、私どもが部落を出発する際に、  
部落民総出の盛大な見送りに発展したのであった。

こうした占領地域における東洋人同志としての心の  
交歓は、我々の苦しかった青春時代の出征。戦後国家  
から見捨てられた心の傷、こうした一貫の不遇の中に  
一条の光明となり生き続けるのであった。

部隊は「ピンナマ」から「ペグー」を経由し、ビル  
マ国境をトラック輸送でバンコク（タイ国）へ、さら  
に鉄路を東進し、「パクセ」ベトナムに駐留すること  
六カ月、内地帰還になりパクセを出発するときは街中

官民総出の歓送の中をベトナムを出発、二十一年五月  
四日懐かしい名古屋に帰り着きました。

母も妹も元気で、また焼けたと思っていた家も無事  
焼け残っていたことが、復員後の私の社会復帰に大き  
な助けとなりました。